

大きな支援の力で歴史の象徴を取り戻す―首里城再建を目指して―

高良 倉吉

首里城復元に向けた技術検討委員長

日米最後の決戦といわれた沖縄戦（1945年）により、沖縄県民の4人に1人は命を失いました。しかし、生き残った4人のうち3人は、戦後の厳しい時代において、挫けることなく伝統文化を復興しました。

空手の達人や琉球舞踊の踊り手、サンシン（三味線）の演奏家、美術工芸の担い手など、伝統の技を持つ人々はそれを絶やすことなく、地域の活力を継承したのです。無形文化遺産は、それを担う人々の手でたくましく発展し、今日につながっています。

しかし、戦争で失った有形の文化遺産を復活させる事業のほうは簡単ではありません。特に、琉球王国の歴史を象徴する首里城は、アメリカ軍の攻撃によって完全に消滅し、その跡地は琉球大学のキャンパスになっていました。多くの県民が首里城の復元を望んでいましたが、容易なことではありませんでした。

大学の移転が実現することになり、それをきっかけに首里城の復元プロジェクトがスタートしました。多くの研究者や専門家、技術者、職人がその作業に参加し、30年余の歳月を費やして2019年2月にやっと完成したのです。

復元された首里城は、さまざまな資料を活用し、琉球王国時代の姿によみがえりました。特に中心的な建物である正殿は、伝統工芸の技術を活かした華麗な、朱色の建築としてよみがえったのです。県民は王国時代の歴史に誇りを持ち、沖縄を訪れる人々は「琉球の美」に触れることができるようになったのです。

しかしながら、復元プロジェクトが完了した年の10月31日未明に発生した火災によって、正殿を始めとする主な建物は焼失してしまいました。そのできごとは県民のみではなく、国内外の人々に大きな衝撃を与えました。

県民はただちに募金活動を開始し、1日も早い再建の実現を望みました。支援の動きは他の都道府県にも広がり、全国各地から首里城を再びよみがえらせて欲しい、という熱いエールが寄せられています。さらに、海外諸国の人々からも支援が寄せられています。

こうした声を受けて、首里城再建のプロジェクトが再びスタートしています。2026年に正殿を再建し、その後に他の建物をよみがえらすことになっています。

火災で失ったことを嘆くのではなく、あの「かたち」を再び取り戻すために、現在、懸命の努力が続いています。